
聖者の書記

彩月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖者の書記

【著者名】

彩月

【Zコード】

N1332M

【あらすじ】

失われた人々の心を癒す、とある聖者の物語
もしくは聖者の書記を歌い継ぐ、とある吟遊詩人の物語

あるいは詩人の歌に心打たれたとある少年少女の物語

それぞれの旅路は交差し、思いは重なるのか

いつかどこかでの国と人

いつからかその町、その国からは人の心が消えていった。

泥棒、暴力、殺人は日常茶飯事であり、悲鳴にあふれかえっていた。でも、そんな中でも希望を人々は持ち続けていた。

何故なら聖者という存在がいたからだ。

自らの欲を捨て、常に人の為に動く、その姿に人々は憧れと尊敬を抱いていた。

聖者の人数は少ない。あたりまえだ、こんなにも町は暗いのだから。それでも聖者たちは町々を歩きわたり、絶望の底に陥っている住民にその教えを説いていった。

聖者は町々で歓迎される。そのときだけでも人々は救われるからだ。そして聖者はそんな人の心をある一冊の書記にまとめた。

いつかどこかでの国と人（後書き）

この話は友人にメールで送った詩をもとに、設定を練り直したもの
です。

初めの投稿とは大幅に世界観が異なるので注意して下さい。

聖者と少女（前書き）

聖者は自分の生まれ育った町へと帰還する。

町はお祭り騒ぎだった。

路地裏を歩いていると、そこには

1人の薄汚れた少女がいた。

聖者と少女

夜の雨降る聖者の町に
少女が1人おりました
街灯ともるさみしい外れに
少女は1人震えていました

少女は聖者に尋ねます
どうして私は凍えるの
聖者は少女に教えます
それはここに炎がないからさ。家において、暖炉があるよ

少女はなお尋ねます
どうしてここには暖炉がないの
聖者は少女に答えます

ここは家の外だから。中は暖かいだろう

少女は後ろを振り返り
この家になんて暖炉はないの
聖者は少し考えて
ストーブや代わりのものがあるでしきう

そして少女は言いました

この町に私を暖める炎はなかつたよ

光の消えた外れの道で
聖者は独り泣きました

ある日、出会った」と（前書き）

少女は歩みを止める。
耳を澄まし、ある人影を見つけた。
そして走り出す。
町はずれの大樹のほうへ。

ある日、出会った」と

「どこから、優しい琴の音が聞こえる。

「きれいなメロディーですね」

木陰にたたずむ吟遊詩人のもとへ1人の少女がやつてくる。

「いつこの町にいらっしゃったのですか？」

声を掛けられた詩人はゆっくりと体を起こし少女と向き合つた。

「1週間前かな、もう旅立つところだけだ。かわいいお嬢さん」

にっこりとほほ笑んだ詩人に少女は顔を赤らめた。

「やだ、そんな…」

恥ずかしそうにもじもじしている少女を包み込むように琴の音は続く。

やがて引き寄せられるように少女と同年代の少年が木のそばへ駆け寄ってきた。

「あれ、リナ、どうしてこんな所にいるんだ？」

「ハルト！」

どうやらふたりは知り合いだつたようだ。

ハルトと呼ばれた少年へ、詩人は体を動かした。

「やあ、おととい僕の歌を聴きに来てくれた子だよね」

「覚えていてくれたんですか！？」

「演奏に付き合つてもらつたのだから。顔ぐらい覚えないと失礼だ

るう

にこにこと笑う詩人に驚きを隠せないでいる少年。

「ところでどうしたんだい、僕に何か？」

「あつはい！」

少年は慌てて小包を差し出す。

「町の人からのお礼です。町長はとても感謝していました」

「こんな所までわざわざ、有難うね。君も」

琴の音を止め面白そうに包みを開ける。

お礼というのと、詩人が小さな町で、演奏会を開いたことに対するもの。

詩人はあまり気にとめていなかつたがどうやら流行り病に相当まい

つていたらしい。

「それにしても本当に悪いね。こんなんだつたら一言会いに行くべきだつたかな。大変だつただろ？、ここまで来るのも

「いっ、いえ、慣れますから」

その言葉はどこか悲しそうだつた。

詩人はあえて気付かないふりをした。

「じゃあ、ここまで来てくれたんだ。ひとつ詩を君たちに送るよ」

『『本當！？』』

「ああ」

再び琴の体制を整えそしてわくわくしている子供たちに、言つた。

「今からうたうものはね…」

そして語りだす。

いつかどこかで人の心が失われた世界を。

その世界で生きていた人々の話を。

そんな世界を見続けた聖者の物語を。

（夜の雨降る 聖者の街で…）

町はずれの大樹から、静かな風が吹きました。

「リナ、俺はさ…旅がしたい」
あの馬鹿は確かにそう言つた。

原因は分かつてゐる。

数日前、私達は吟遊詩人の旅人と出会つた。

私が彼の歌声をどうしても聞きたくて（ちょっと今まで私は流行り病にかかっていたのだ）大樹の所まで会いに行つたとき、偶然旅人にお礼を渡しに来たハルトと鉢合わせになつた。

その後詩人は曲をプレゼントしてくださつたのだが…

正直私には難しくて理解出来なかつたのだが、ハルトはやけに感動したらしく、歌が終わつてから詩人に付きまとつてゐた。

また、その日から何か調べ物をしているようだし。

そもそもこいつがはつきりと感情を私に見せること自体珍しい。よっぽど影響が大きかつたようだ。

「でも何でいきなり旅をしたいなんていいだすのよ」

取り合えず理由は聞いておかないと。

「どうせくだならい理由でしょ」

敢えて挑発的な言い方をしたら、意外にもあいつは否定しなかつた。

「まあ、お前にはくだらなく聞こえるかもな。所詮この町から逃げようとしているということには変わりない」

お前には、を強調されて少しむつとした。が、すぐにその怒りは別のところへと向かつた。

所詮、そう本当に所詮なのだ。

私は結局のところ彼が、自分の待遇に不満を抱いていることを知つてしまつた。

「あつでも理由なら、ちゃんとあるぜ」

その場の空気が明らか悪くなつたのを感じたのか慌ててあいつは話

を進めようとした。

「あの後、曲が終わった後を…」

ハルトの言葉で私もその時のことを再生し始めた。

「この歌は…」

聖者と少女、というタイトルのとうづ一人の会話で構成されていた
その歌。

むしろ詩と呼んだ方がいいのかもしれなかつた。

ハルトも何も言つてないからよく解らなかつたのだろう。そう思つ
てちらつと彼の様子を窺つてみた。

そして私は変な声を出してしまつた。

「ハルトオ！？」

彼は呆気に取られていた。それも私とは違う、感動の方で。

「どうだつたかい？僕の歌は」

しばらく口をパクパクさせていたが、ようやく声を出せるようにな
つて

「素晴らしいです！！！あついや、その凄かつたです…」
シユルルルル」とすぐさま顔を赤らめる。流石に大き過ぎたと自分
でも気付いたのだろう。

「そう、よかつた」

詩人はにつこりして私も方を向いた。

「ちょっと口で伝えるのには難しい内容かなつて思つたから
うう。ばれていたのか。

一人で小さくなつていると、詩人は楽しそうに見つめていた。
そして作品について語り出した。

I want to (後書き)

この物語は聖者の世界の「詩」、それを歌う詩人の「童話」、その歌に影響を受けた少年少女の「物語」の三つ（時々説明も入るけど）で進められます（その予定です）。そして私は詩を書くことが大変苦手です。つまりこの話はだらだらとしてしまうと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1332m/>

聖者の書記

2010年11月3日13時30分発行